

市民感覚で博物館を

広川千枝

一——はじめに

今も昔も普通の市民にとって、博物館を「暗いカビの匂いにする」イメージでとらえているということにあまり変わりはないようです。博物館は過去の時間を再現する施設であって、自分の生活の現在や未来とはあまり関係があると思えないようです。美術館や動物園が何をかくそう博物館だといったら「ウッソー！」という声の方が大きいに違いないのです。NHKみんなの歌に「メトロポリタンミュージアム」という曲が

あります。ヘタイムトラベルはたのしみとくり返し歌うのですが、ファラオやミイラといった時代へのタイムトラベルなのです。

さて、私たちにとつてもっとも重要なのは「今」であり、「今」が重要だから過去を検証し、「今」を未来に向けて築く手が必要なのです。「ここに博物館の出番がある」とある友人は力説します。私たち市民の今おかれている状況を科学的に分析してみせてくれる部分もきっとあれば、そんな博物館体験をする市民が増えれば、博物館のイメージは

変わるでしょう。図書館で本を読むより百聞は一見にしかずでしょうし、公民館で講師の話をきくより、納得できるのだと悟るはずです。

相模原にはそんな博物館がほしいと、ときどき市の博物館準備室に顔を出しては前に出した要望書の補強の意味も含めてひとくさりおしゃべりしてくるのです。もっとも、あまり有難くなさそうならいと、どう返事をしてよいか当惑気味の若い職員の顔を見くらべながらなのですが。

二——博物館に行ってみよう

まずは博物館に行ってみましょう。「ウチはそんなことはありません」とおっしゃるむきは一般論とご容赦ください。

入口で（映画館の窓口みたいなのはいただけません。）三〇〇円くらいの入場券を買って中に入ると、博物館で唯一お会いする職員、パートのおばさんが半券を渡してくれます。

「順路」にしたがって地域全体の概要をパノラマでみると「昔の〇〇市」の部屋に入り、レプリカの原始

一——はじめに

二——博物館に行ってみよう

三——教育活動と学芸員

四——社会教育と博物館

人、動物のはく製の居る森、たて穴
住居で古代社会を頭に入れて先に進
むと、当時つかわれていた、石器、
土器のコーナーへ、「古代人の技術
もセンスもなかなか」とよく見れば、
火にかけた跡、こがしてしまった穀
類なんかをみつけ、フツの主婦の
私は思わず生活の中に引き入れられ
てしまつて「こげあとはきれいにと
れてるのかしら、それにしても意外
と内側はなめらかみたい」と、中を
のぞきこんだり、内側をさわつてみ
たい欲求にかられます。みればバラ
バラのを復元した様子、どうにもな
らないかけらなんかたくさんあつた
だらうに、せめてそれをさわれるよ
うにしてくれないものかと思うので
す。

これは」と手にとりたくなくなります。
「これはこうして」と自ら動かして
しまふお年寄りなどがふと見ると
「手をふれないでください」の看板。
「あんな風に並んでいると道具が死
んでる」といった人もあります。「上
から読んでもタゲタ、下から読んで
もスルス」なんて歌っている子ども、
極めつけ「マンガ(マンガワ)って
何も描いてないじゃない!」という
わけで、生活とのつながりが見えて
こないのです。

いる姿の写真でも添えてください。
植物の標本も同じ、みな茶色にな
っていて「葉のつき方は互生なんだ」
なんてことしかピンときません。近
ごろカラー写真が添えてあるところ
もふえましたが、できればその植物
の環境ごと写してほしいと思うので
す。

起こってくる問題は何なのか、地域
住民に対する問題提起をするくらい
はせめてして欲しい。科学的な解決
への方策ぐらいあつて然るべきでは
ないでしょうか。

例えば、一番ひどい航空機騒音を
体験できるヘッドホーン。工業団地
と河川汚染の関係、開発によつて変
わつてしまつた環境。高齢化社会の
予測。交通と道路。とりあえず、思
いつくまま、わが地域の課題をあげ
てみました。あたりさわりもありま
しょうが、博物館と地域はぐつと近
づくと思うのです。

ひとまわりしたところで、もう少
し質問などしてみたいなと思つて館
内を見まわしても、大てい、シーン
と静まり返つていて、学芸員さんな
らんどどこにいるのやら、どこに、ど
ういつて聞けばいいのかわからない
という館がけっこうあるのです。

公民館の窓口にはいつも職員がい
ますし、図書館には「相談コーナー」
「レファレンスコーナー」などがあつ
て、いつもやさしそうなお姉さんが、
「なんでもどうぞ」といわんばかり、

さて次、ご先祖様から、ついこの
間まで使っていた民具が展示してあ
ります。すき、くわ、脱穀機、みの、
じざいかぎ、背負子、ときには復元さ
れた民家のしかるべき場所になにげ
なげに置いてあることも。中には、
なんの道具なのか、どうして使うの
かわからないのもあつて、「なんだ

たものを除いて体験できるようには
ならないものでしょうか。

数年前、静岡の山の中の小さな資
料館で、脱穀機を廻したり、ふいご
つきオルガンを鳴らしていた大学生
たちの目の輝きが忘れられません。

次なる部屋は「キモチワルイ!」
と女子高生の声がきこえる。ホルマ
リンづけの動物たちの並んでいる部
屋、みな一様にブヨブヨしたうすび
ンクの物体は、科学者ではない一般
大衆にはどれも同じ気味の悪さ、生
命感がありません。せめて、生きて

「公害」と書いてあるコーナーなど、
少しひがんでみると、できればあま
り見て欲しくないんじゃないかと思
うくらい小じんまりしていたり、原
因にはふれてなかつたりと、気の抜
けたようなものもあります。

私たちにとつて関心深い今、現在、
地域の中で何が起きているか、将来

博物館は少しつれないのでは？

それでも博物館大好きです。

三 教育活動と学芸員

博物館の「教育活動」は、他の調査・研究、収集・保存などの活動と比べて直接住民とかかわり、地域住民の力量形成に役割を果たすものから、私たちの期待も大きいのです。

「土器づくり」「探鳥会」「わら細工づくり」「古文書のよみ方」「地質と植物」などの多様な講座や教室から力量をもった住民が大勢集立っているし、地域の自主的活動のリーダーとして活動している人たちも育っています。

そのこと自体は評価すべきことなのですが、前にも述べましたように、いわゆる博物館的な講座だけでなく、今日的な地域課題をテーマにしていただけなものでしょうか。これらのテーマは公民館だけの専売特許ではありません。博物館だからこ

す。

このことは、博物館と住民とかかわり方とも関係があるのです。

私は日常的には地域の公民館活動に参加しています。参加というより、公民館活動の一つの役割を担っているつもり。

わが東林公民館の事業がどうして実施されるかを書いてみます。

公民館長は地域住民、運営審議委員が二五人、これは審議機関、事業の最終決定はこの人たちです。専門部、企画、実行はこの人たち、その他、一般の住民がときによって参加します。

まず、年度当初に、文化部、青少年部、広報部、体育部などの専門部委員が部会をひらいて、その年度の館の方針を中心に年間事業の企画をたてて、運営審議委員会の承認を得て、館報で地域に知らせます。準備段階に入ると、講座の種類やテーマによっては、館報で準備委員を公募します。準備委員が集まると、専門部員の中の担当者、職員とで準備委員会を発足させ、テーマ・カリキュラ

ム、講師の選定及び交渉、終了後の記録誌づくりまで職員と住民の共同作業になります。この作業の中で、テーマのたて方、学習の方法、講師の選び方など、職員の果たす役割はとても大きいのです。このプロセスが重要、それぞれが抱えこんでいる生活課題、必要性を感じている地域課題をもちこみ、討論をしながら、次第にしぼりこまれ、テーマになりカリキュラムにつくられています。

これらの方法と比べると、博物館と住民のかかわり方は、あくまで職員主導、あまり体験のない私がいちのもいささか気がひけますが、住民は博物館の協力者という範囲にとどまっており、テーマも一定の枠の中の選択にとどまっているのではと思ったりもするのです。だいぶ前に「博物館の自主講座って、やらせね」といって学芸員諸氏に総スカンをくったことがあります。

博物館と公民館の教育のあり方はそれぞれの方法があつて違うのが当然とおっしゃる方々の声が聞えるような気がしますが、公民館と同じ

にしるとは申しません。なにか枠にとらわれない方法があると思うのです。そうすれば私たちからみて比較的閉鎖的な感じのする博物館が、開かれた博物館というネアカなイメージに変わるのではないのでしょうか。

博物館がなんとなくネクラで閉鎖的にみえるのは、社会教育主事養成と学芸員養成の過程でも、最初から人といっしょになにかしてゆくことを学んでくる社会教育主事と、個人的かつ研究的かつ技術的なことを学んでくる学芸員との違いがあるのではとも思えます。

博物館を利用している友人たちがよくいう言葉に「学芸員の方たちは研究者なのよね」、学芸員の方たちは博物館の職員である前に、それぞれの分野、天文とか民俗とか地質といった専門の研究分野をもっています。中には本当に優れた研究者としての実績をもった方もあります。こういう人たちのごく一部に、地域住民の学習を保障する教育専門職であることを重視しない場合があるので、そんな不満が住民同士のおしゃ

べりに結構でできたりするのです。この件に関しては片方の責任ではないはずで、職員を育てるのは住民の責任でもあるはずですから。住民は自らの教育条件の整備をきちんと要求していくべきなのです。

それにしても、学芸員の職務内容が複雑で多様な能力を必要としていることは驚くばかり。教育専門職、研究者、技術専門職、プラス、運営や施設管理、事務的な仕事などこれらの仕事を全部こなす人は並の努力ではないと思います。その資質を住民のために十分發揮してもらうためには、必要な人員配置がなされていなければなりません。

よく博物館の職員を訪ねて、いわゆる裏側部分にお邪魔したりするのですが、足のふみ場もない程資料が山積になっていることがあります。「いやあ、ひまがないんですよ。これだけのものを整理して展示が可能な状態にするには相当まとまった時間が必要です。そのまとまった時間やつがないんですよ。なんとかならないのでしょうか。」あの中に

必要な資料がうもれているかもしれないのね」などと、職員が気の毒だという気持はあるにしても、なか腹立たしい気持にもなるのです。学芸員諸氏よ！みなさんの労働条件も含めて、住民の博物館活動はみなさんのがんばりにかかっているのですから。

頼りにしています！

四——社会教育と博物館

知人に地方の村会議員さんがいます。村に博物館ができることになり、話をきかせて欲しいといつて議会資料を見せてくれました。「博物館で教育施設なんだってなあ、教育長が説明してたよ」。断っておきますがこの人、けっして嫌味なよくあるタイプではなく、村の民主化と不正事件を批判して、改革派の人たちに押されて初めて当選し、目下なんでも勉強と燃えている、気のいいおじさんなのです。私も、どうせつくるならいいものと思ったので、なげなしの知識を総動員して、懸命に、博物

館とは何なのか、なにをめざすのか、学芸員という専門職が必要で、などと話をしました。

次に行ったとき、おじさんは熱も冷め果てたように「広川さん、あきらめな、ロクなものではできませんよ。博物館なんてものは観光施設でいいんだってみんなでいうんだよ。補助金だって文部省じゃねえんだ。農林省だか、その関係のどっかから出るんだとよ」というのです。

その次の夏、村の国民保養センターの中に「〇〇村資料館」なるものができました。当然のことながらかけつけてみると、なるほど農林省関係のなんとか協会かなんかが補助をしたことが書かれた看板のすぐ横から階段をのぼると、少し床の高い平家建コンクリートの建物、付属施設の復元された民家もできています。

どうみても整理され、研究されたとは思えない民具を中心とした展示が、ちよつと無造作に並べたといった感じです。

研究施設がないのはもちろんですが、事務室を除くフロアー全体が展

示室で、収蔵庫らしきスペースはありません。それでも、元校長先生といった感じのお年寄りが、入館者に展示の中ではくわしく説明されていない、地域の自然条件と産物それに合わせて工夫されている民具などについて解説していました。

次の夏、資料館は、観光シーズンにもかかわらず静まり返っていて、セミしぐれの中、付属館の民家を訪ねると、いつぞや解説をしていたお年寄りが、ポツンと入口に座っていました。うす暗い屋内に一歩入り、土間に続く炉端をみると、何度見てもギョツとして、今夜悪夢にうなされそうな人形が立ったり、仕事をしたりしている。「なんとも気味悪い人形でしょう」と急に例のお年寄りから声がかかると、むしろホツとしたものです。

話にきくと、これを復元するとき、しかるべき業者に発注しようと思積もりをとると、あまりに高い、一体百万円以上するとかで、家族の人数をへらそうかと話していると、ある人が人形をつくる人を知っているの

で安く頼んでくれるというのです。そうだ、そうだということになってしまつて、私は反対したのですが、こんなことになりましたというわけなのです。それでも、本館よりはるかに生活がにじみでている展示の努力がみえるのはせめてもというべきでしょうか。

あれから三年ぐらいたつたでしょうか、それでも、四回程のぞいてみます。しかし、ただの一度も村民らしき人に出会つたことはありません。また観光客らしい入場者にも数えるほどしか出会つていないのです。そのせいか今春、国民保養センターの施設をつなぐ道路を、入口から、まず資料館の前を通るように変えてありました。もつとも、連休だというのにほとんど人が入っていませんでした。

最近あちこちで建っている博物館の中にはこの資料館のようなものもずい分あるのではないのでしょうか。教育施設として、地域の社会教育の

状況をふまえ、きちんとした構想をもつて設置されたものであればこんなことにはならなかつたでしょう。

ちなみに、この村の教育委員会は観光課と同じセクションにあつて、私が行つたとき社会教育係(?)の四人の職員が、小さな公民館でおこなう「木彫教室」の準備をしていました。

博物館は、住民の学習、文化創造を公教育として保障する教育施設だと信じて疑わない私でありますから、このような無残な結果をみると「博物館法によらない博物館」「首長部局の文化行政が所管する博物館」なるものが、将来、私たちに何を保障してくれるのかと不安を感じざるを得ないのです。

相模原の博物館づくりは、文化協会の人たちの要望書提出にはじまり、学校教育関係者の博物館に関する研究や要望、公民館活動を中心とする社会教育をよくする市民の会の要望書提出など、多くの住民の運動

があつて推進されています。二一カ所の公民館には常に「博物館準備室だより」が置かれ、常設の郷土資料室は実験の意味も含めてさまざまな展示を行っています。でも残念ながら、準備室は今も準備室、用地が米軍施設の跡地で、大蔵省との交渉が進まないのです。

その間にも各公民館ごとにつくられた「まちづくり委員会」の提出した「まどめ」をもとに「第三次相模原総合計画・二十一世紀をめざすさ」がみはらプラン」が策定されました。内容はかなり抽象的なものになっています。もし、公民館とともに博物館が完成して、かかわつていたら……多分、もっと具体性のあるものになつたのではと残念でなりません。また、もしここで相模原市民が博物館体験を経たならば、その中から私たちは多くの博物館の可能性をみることができたと思うのです。最近、松下圭一氏が「社会教育の終焉」なる本をお出しになりました。

社会教育は本当にその役割を終えたのでしょうか。

むずかしいことはわかりませんが、私たち生活者の側からみると、住民の生活が次々と新しい課題を抱えこんでいく以上、終焉なんてあるのかと思います。社会教育の「見スマート」なある部分をとらえての発言としか思えません。社会教育法の「實際生活に即した文化的教養」の上の部分だけが抜け落ちていのではないのでしょうか。

社会教育はこれからどのような発展をとげていくのでしょうか。少なくとも、博物館、図書館、公民館がそれぞれの役割を尊重しつつ連携して住民の学習を保障すること、そして住民は、それらにかかわる幅広い活動と交流しつつ力をつけ合つてゆくこと、そして社会教育は地域に大きく根をはっていきと確信して、今日も活動するエネルギーをふるい起こすのです。

△相模原市在住▽